

Tdap（ティーダップ）とは

1. Tdap（破傷風（Tetanus）、ジフテリア（diphtheria）、百日咳（acellular pertussis））は、日本以外の多くの国で、主に百日咳予防（+破傷風予防）を目的とした定期/推奨接種として使用されている国内未承認ワクチンです**。

主に10歳以上のティーンエイジャーと成人の免疫維持、妊婦の胎児保護、医療従事者などのブースター接種を目的として使用されています。

=====
**米国（11～12歳の子どもに定期接種。妊婦にも毎妊娠ごとに接種推奨（妊娠27～36週）。成人にも破傷風ブースターの代わりにTdapを使用する。）

カナダ（子どもと青年に定期接種。妊婦への接種も推奨。成人も10年ごとのブースターとしてTdapを使用する場合がある。）

オーストラリア（小児期のワクチン接種スケジュールに含まれる。妊婦と出産直後の家族への接種も推奨。）

イギリス（妊婦に対して、百日咳から新生児を守るために推奨。子どもの定期予防接種にはTdapではなく、Td/IPVなどが使われるが、ブースター的に使用されることもある。）

ニュージーランド（小児・青年への定期接種。妊婦や医療従事者、育児に関わる人への接種が推奨。）

フランス（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

ドイツ（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

イタリア（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

スペイン（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

ベルギー（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

スイス（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

ギリシャ（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

アイルランド（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

イスラエル（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

アルゼンチン（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

ブラジル（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

メキシコ（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

コロンビア（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

ベネズエラ（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

ペルー（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

エクアドル（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

ハイチ（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

インド（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）

パキスタン（妊婦への定期接種を推奨。成人へのブースター接種も推奨。）**

=====
2. 日本では、Tdapと同様の成分を含むDPTワクチン（三種混合）やDTワクチン（二種混合）が定期接種に使用されていますが、成人の百日咳予防目的での妊婦や成人への追加接種は一般的ではなく、海外に比べると推奨度は低めです。

3. Tdap と DPT ワクチンは、基本的に同じ3つの病気（破傷風・ジフテリア・百日咳）を予防するためのワクチンですが、対象年齢・分量・使用目的に違いがあります。

DPT（三種混合）は、主に乳幼児（生後2ヶ月～）の初回免疫獲得を目的としており、百日咳成分(aP)が多め、ジフテリア成分(D)も破傷風成分(T)も多めであるため、大人が打つと副反応（だるさ、発熱）が出やすい。一方、Tdap は、副反応を抑えるために、大人向けに成分が調整されていて、百日咳成分(ap) とジフテリア成分(d)が少なくなっています。

4. Tdap が 妊婦に接種される理由

Tdap は妊婦に接種することで、母体から胎児に抗体が移行し、生後すぐの赤ちゃんを百日咳から守る効果があります。日本ではこれが行われていないため、赤ちゃんの百日咳予防が遅れるリスクがあります。

5. 日本ではなぜ Tdap が認可されてないのか？いくつかの制度的・歴史的・疫学的な背景があります。

(1) 歴史的なワクチン行政の保守性

日本は過去にワクチンに関する副反応問題（例：MMR ワクチンや子宮頸がんワクチンなど）で訴訟や社会的混乱を経験した経緯があり、それ以来ワクチン行政は非常に慎重です。

新しいワクチンの導入には長期間の安全性・有効性データと、国内治験が求められる傾向があります。

(2) 成人・妊婦の百日咳対策の優先度が低い

日本では、百日咳の患者数は欧米と比べて報告数が少なく、これまでは大きな流行も比較的少ないとされてきました（実際には見逃されている可能性もあります）。そのため、厚労省の中で「妊婦や成人への Tdap 接種の必要性」があまり高く評価されていない現状があります。

(3) 既存ワクチンでの対応方針

日本では乳児期に DPT（三種混合）を接種し、小学校就学前に DT（二種混合）でブースターを行う方式が定着。成人向けには「破傷風トキソイド（T）」単独でのブースター接種が多く、百日咳を含むワクチン（Tdap）を使う発想が根付いていません。

(4) 製薬会社の採算性の問題

Tdap は大人向けワクチンで、定期接種対象にならなければ自己負担になる可能性が高く、需要が読みにくい。製薬会社がわざわざ治験を行って日本での承認を目指す経済的インセンティブが少ないとも言われています。

(5) 世界とのギャップ

WHO や CDC（米国疾病予防管理センター）は妊婦の Tdap 接種を強く推奨していますが、日本ではまだ「妊婦へのワクチン接種＝慎重に」という空気が強く残っています。妊娠中の医療介入に対して消極的な文化的背景も関係しています。

6. 今後の可能性

高齢者や医療従事者での百日咳の流行、あるいは妊婦や新生児の死亡例などが報道されれば、政策が見直される可能性はあります。